



Tokyo Gakugei University Repository

東京学芸大学リポジトリ

<http://ir.u-gakugei.ac.jp/>

Title	コメント (地理教育シンポジウム) (fulltext)
Author(s)	吉田,和義
Citation	学芸地理(68): 40-41
Issue Date	2013-07-31
URL	http://hdl.handle.net/2309/134217
Publisher	東京学芸大学地理学会
Rights	

コメント

吉田 和義*

29期の吉田でございます。長年小学校の現場にいましたが、今年の4月から創価大学に移り「社会科教育法」を担当しています。今日は諸先輩方を差し置いてコメンテーターというのは大変恐縮ですが、簡単にお話できればと思います。

今日の報告は非常に多岐にわたっており、とても全部をまとめるようなことはできませんが、長年教育現場にいたという経験からお話させていただきます。

まず、「教育は科学史の追体験」という言葉を聞いたことがあります。例えば、算数・数学の例に当てはめて考えますと、ピタゴラスの定理があります。これは、ギリシャ時代において数学の最先端でした。しかし、今は中学校で勉強します。また、微分という考えは、ニュートンが生きた17世紀において数学の最先端でした。ところが今は高等学校で習います。つまり、非常に大雑把な捉え方ですが、数学が発展してきた科学史をなぞるように子どもたちが勉強し、そして大学に行って最先端の数学を学びます。

一方、地理の内容を見ますと、現在、中学校段階で動態地誌を学ぶということが先ほどの報告でもありました。しかし、静態地誌はそれに先立って行われていて、その時間の方がずっと長かったのです。私は、地理においても科学史をなぞるように学習するとすれば、動態地誌を

学習する前に、初めて触れるのは静態地誌でもいいのではないかと思うわけです。むしろ最初に静態地誌を学習して、動態地誌を学ぶ方が効率的ではないでしょうか。現在、小学校の学習に地誌学習がありませんので、中学校でいきなり動態地誌を学習することになります。地理学においても最先端の研究が多々発表されていますが、たとえ古いものであっても、地理学が明らかにしてきたものすべてが財産なのです。ですから、これらの財産を古いからといって切り捨ててしまわずに、児童・生徒の発達段階に合わせて活用していくのが最適だと考えます。地誌に関しましても、まず静態地誌をやり、それを補足する形で動態地誌を扱うのが理想の形になるでしょう。ここで実践的な話はできませんが、発達段階に合わせた地誌は以下のような順番になるのではないのでしょうか。

最初は基礎世界像の形成になります。小学校の5年生で世界の大陸・海洋名と主な国々をいくつか学習するのは、基礎世界像の形成をより重視しようとする趣旨だと思います。次に、自国を中心とした地誌を学習します。日本から世界を見るとどのように見えるのか、おそらく中学校で学習されている内容の中心がこれに当たるでしょう。そして、多極的な地誌ということになります。例えば、中国から世界を見るとどのように見えるのか、これは当然日本からの見え方とは違う内容になります。第3段階は難し

* 創価大学（学部29期，院37期）

い内容になると思いますが、目標設定はそういったところになります。

中学校の地誌教育については、本日の堀内先生の講演で非常に丁寧にご説明をいただきました。地誌教育の改革に繰り返し取り組んできたものではないかと思えます。しかも歴史などと比べて、地理学習の改革は大胆に行われてきたのではないかと思えます。ただ、それがよかったか、これからどうしていくべきなのかはあらためて考えなくてはなりません。しかし、その取り組み自体と新しい教育を作ろうという意気込みは大変評価されるべきものであろうと思えます。

さて、地理教育の目標は何かといいますと、やはり世界像の形成を支援するということがあげられます。それは世界の多様性や相互依存性といったものがわかるようになることです。「所変われば品変わる」という言葉もありますが、ただ地域の違いを見るだけでなく、場所と事象がどう絡み合っているかを含めてわかるようになることが重要だと考えます。それがわかるようになる、自分が所属している地域を相対化して捉えることができるようになります。また、思考力を高め、考えることができるようになり、思考判断のよりどころをもつことができるようになります。これらを通して、社会科の最終的な目標である「公民的資質の基礎」の育成に地理として迫っていくことができるのではないのでしょうか。

先ほどの3つのご報告について述べますと、山田先生はアフリカのイメージをどのようにもたせるかということについて真摯に取り組んでいただきました。小学校の社会科ではアフリカについては学びません。ただし低学年の音楽では「ゴリラはウッホッホ・・・、アフリカのジャングルでー」という曲が出てきます。児童はアフリカについて知っており、低学年の子ども

ちはゴリラがいて、自然の多いアフリカに行ってみたいと思うわけです。その段階ではまだアフリカに対する偏見はありません。しかし、その後のどこかの段階でアフリカは貧しいというステレオタイプが植えつけられてしまいます。小学校段階ではアフリカに関する学習がないので、これらを相対化するチャンスがありません。そこで、中学校段階の地理でアフリカの内容を補足していくことになります。

大屋先生の報告は、基本的には知識が重要だということでした。そして、その知識が自分の世界の中できちんと位置付けられていないと、生徒は一生懸命勉強しても知識が定着することがないという指摘だったかと思えます。世界図を自分の中で組み立て、その中に地域を位置づけることで初めて地理の場面で知識を活用できるのではないのでしょうか。

鉄川先生のご提案は私には非常に大胆な提案に感じられました。アメリカ合衆国を事例として、地理学的手法を取りつつ地域像を組み立てていくという大変貴重な報告でした。ただ、受験校ということで、中学校受験で大卒の知識の吸収が済んだ子どもたちでありますので、そのことも考慮しなくてはならないだろうという気もしました。

地理学習は、地理学の財産を使って面白い地理授業をしていくことが大切です。「地理学を学ぶと人生が2倍楽しくなる」と本学名誉教授の(市川健夫)先生がよくおっしゃっておりました。この楽しさを教師と児童・生徒の間で共有するために、私たちも地理学の財産を増やし、楽しさを共有できる授業をめざしていかなければならないと思えます。そして、その接点に東京学芸大学地理学会がなればと思っております。全てをコメントできませんでしたが、いくつか思うところをお話しさせていただきました。